

第2章 石川町の将来像

2-1 まちづくりの将来像と基本理念

2-2 将来人口フレームの設定

第2章 石川町の将来像

2-1 まちづくりの将来像と基本理念

- 石川町では平成2年度に21世紀を見据えた都市整備のマスタープランとして「石川町都市基本計画」を策定し、総合的なまちづくりの指針としてきた。その後、福島空港の開港やあぶくま高原道路の整備、本町を含む阿武隈地域が首都機能移転候補地に選定され、さらにはあぶくま新都市（仮称）の一部に位置づけられるなど、まちの発展の可能性を促す広域的な条件が整いつつある。
- その一方で、「石川町都市基本計画」策定直後に発生したバブル経済崩壊以降の景気の低迷、速度を増す少子高齢化社会の進展と人口の減少傾向、高度情報化・広域行政への対応の必要性など、21世紀を迎えた今、直面する問題は多様である。
- また、人々の価値観の変化はライフスタイルの多様化をもたらすとともに、地方分権の進展による自治体のまちづくり意識の改革、全国各地にみられるNPOのような新たな形態の組織によるまちづくり活動の萌芽など、住民一人一人がまちづくりをより身近な、そして様々な視点でとらえ、生活していくことが求められている時代が到来していると言える。
- このような背景のもと、本町では平成5年に策定された「石川町第3次総合計画」継承しつつ、平成13年度から平成22年度を計画期間とした「石川町第4次総合計画 キララ21プラン」の策定を行なったものである。

第4次石川町総合計画 町の将来像

「ひと・自然が融け合う あぶくま高原都市 いしかわ」

このため、石川町都市計画マスタープランにおいては、以下に示す4つのまちづくりの基本理念により、第4次総合計画の示す将来像の実現を支えていくものとする。

まちづくりの
基本理念



○ 石川の独自の文化が輝くまちづくり

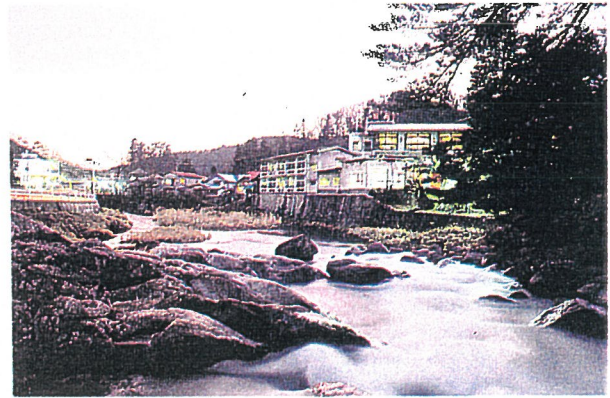
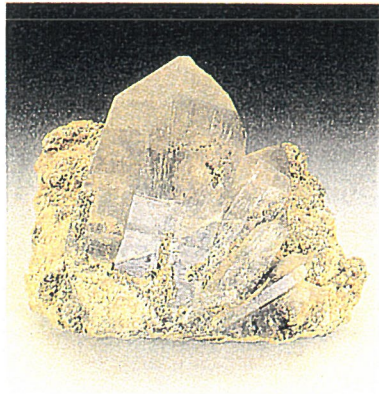
○ 自然環境と都市環境が融け合うまちづくり

○ みんなが健やかにくらすまちづくり

○ 健全な都市活動が営めるまちづくり

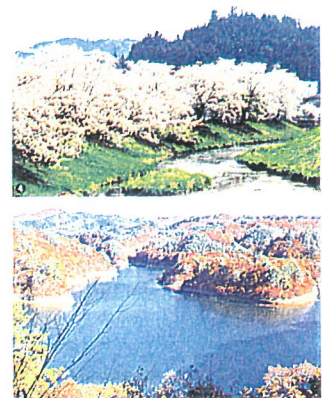
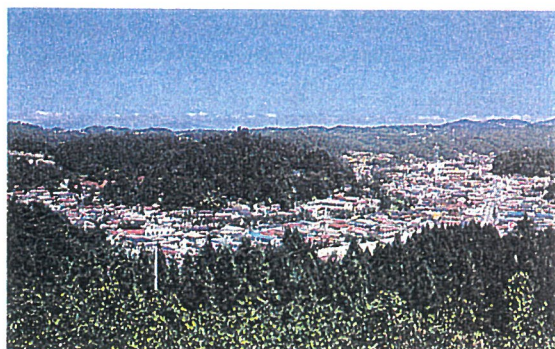
基本理念1 石川の独自の文化が輝くまちづくり

- 石川町の歴史・伝説、鉱物の宝庫としての石の文化、人々にうるおいを与える川の文化、石川温泉郷の温泉の文化、そしてそれらの文化を包む森の文化といった独自の文化を、水晶の如く磨き、活用し、石川らしいまちづくりに輝きを与える。
- 文化の継承、魅力付け、周辺的环境整備などを展開する。



基本理念2 自然環境と都市環境が融け合うまちづくり

- 自然の維持管理と活用
 - ・ 石川の重要な歴史的所産であり、水や大気をつくり、様々な動物や植物を育む森の自然環境の維持保全に努める。
 - ・ ダム周辺や温泉地周辺などでは、自然とのふれあいの場やレクリエーションの場として、自然環境との調和に配慮しながら活用を図る。
- 自然が身近に感じられる市街地整備
 - ・ 市街地を流れる北須川や今出川の川辺空間を活用した広場や散策路などの整備、ポケットパークや橋詰広場の整備、石川の気候風土に適した街路樹や季節折々の花々などの植栽、市街地を包む斜面緑地などの景観保全を図る。



基本理念3 みんなが健やかにくらせるまちづくり

- 町で「暮らす人」、「働く人」の誰もが快適に健やかに暮らせる町、愛着を持って住み続けたい、移り住みたくなるような「町」をつくる。
- 子育て世代、高齢者や障害者などを含む全ての人が安心して、生き生きと日々の生活を営み、積極的に社会参加できるようなまちづくりを目指す。
- 石川町を訪れる観光客など、石川の土地勘がない人にも分かりやすく、地域の人々と楽しい交流ができるようなまちづくりを目指す。



基本理念4 健全な都市活動が営めるまちづくり

- 産業として魅力のある農林業の展開、魅力ある商店街づくり、温泉などの観光レクリエーションの振興、また臨空型産業を中心とする新しい産業の展開などが相互に波及しあい、石川町全体の地域経済活動を活発にするようなまちづくりを目指す。
- 様々な都市活動を支え、地域経済活動の発展を支える道路ネットワークや、公園、上下水道、高度情報などの都市基盤施設が整ったまちづくりを目指す。



2-2 将来人口フレームの設定

将来人口フレームについては、第4次石川町総合計画の将来目標人口と整合を図りながら、以下のように設定する。

石川町第4次総合計画の将来目標人口

本平成13年から平成22年を計画年次とした第4次総合計画においては、将来目標人口を21,500人と設定している。

⇒ 第4次総合計画（平成13年～平成22年）の将来目標人口は、21,500人

中間年次（平成22年）の人口フレームと増加人口

都市計画マスタープランの目標年次については20年後の平成32年とするものであるが、中間年次として平成22年の将来人口フレームについては、第4次総合計画の将来目標人口との整合を図り、21,500人とする。

⇒ 中間年次の平成22年の将来人口は21,500人と設定する

なお、平成12年を基準年とすると、現在人口は19,913人であることから、約1,600人の増加人口が必要となる。これについては、宅地造成等による用途地域内未利用地の活用及びあぶくま新都市（仮称）の開発等による増加分を見込むものとする。

目標年次（平成32年）の人口フレームと増加人口

目標年次である20年後（平成32年）の人口フレームは、中間年次の21,500人に1,500人を加えた23,000人と想定する。

⇒ 目標年次の平成32年の将来人口は23,000人と設定する

なお、平成22年から平成32年までの増加人口約1,500人については、引き続きあぶくま新都市（仮称）の開発及び長久保新市街地等の開発等による増加人口を見込むものとする。

将来人口フレームの設定

上記より、将来人口フレームを次のような設定する。

	平成2年	平成12年	平成22年	平成32年
人 口	21,534人	19,913人	21,500人	23,000人
世帯数	5,330	5,402	6,000	6,400

※平成22年、32年の世帯数については、現状の3.6人／世帯を維持するものと仮定し、人口から割り戻したものである。